

坊の客観記録、而是一名日本籍摄影师通过镜头感受到的痛苦与悲伤、罪恶感以及一点希望和释怀。

全体を振り返っての感想

西 順子

日本に帰国して、まず思ったことは、参加して本当によかったなということ。自宅に帰ってすぐ、興奮する気持ちで、夫や子どもたちに、南京で経験したことを話した。ぜひ、夫や子どもたちにも体験してもらいたいと思った。

日本に戻ったとき、中国に行く前より、しっかりと地に足を着けているという感覚になっていることに気づいた。どしっとしているというか、安定感があった。しかし、感じやすい自分にも気づいた。中国の話をすると、涙がでてくるような感覚と共に感情がでてくる。感じやすい自分だけけど、でも安定して落ち着いているので、とても楽でいられる。この安定感は、日本人であるというアイデンティティをもてたことが大きいのではないかと思う。この感覚は、日本を出て南京を訪問することで、もたらされたものである。

今回の訪問を通して、私は今まで、「日本人である」というアイデンティティはもっていなかったということに気づいた。日本で生まれ、日本で育ち、海外旅行の経験はあるものの、日本人であることが当たり前すぎて、日本人であることを自覚したことがなかった。しかし、南京記念館で、市民の人々がたくさん見学するなかで共に見学するという体験、そして中国の参加者と共にドラマやアートなどを通して、戦争の傷跡が肌で伝わり、感じるという体験をするなかで、自分が日本人であることと向き合うこととなった。南京の地で、人々の悲しみ、怒り、恥の意識を知り、感じるなかで、自分が日本人であることを相対化して捉えるようになっていた。

私が得た「日本人である」というアイデンティティは、私は日本人であることに責任をもちたいという感覚である。過去に犯した戦争の加害の罪は、過去

だけにあるのではないと思った。今、この世の中を生きている自分たちが、どう引き受けていくのか、ということがとても大事であると実感した。なぜなら、過去ではなく、今戦争の傷跡に苦しんでいる第一世代、第二世代、第三世代がいること、その痛みから、今私たちは目を背けてはいけないと思った。それは人のためだけではない、自分がこの世界で正々堂々と生きるためである。

今まで、「加害の責任を負う」というと、なんとなく怖いイメージがあった。糾弾されるような、責めを負うイメージであった。しかし、今回の経験を通して、「加害の責任を負う」ということは、なにも怖がる必要はないこと、むしろ、どっしりと今生きている世界、地に足をつけることだと感じた。怖がることも、逃げることもない、ただ、目の前にいる人々の声を聴いて、共に過去を悼みたい、そして、平和な未来への希望を感じていきたいと思った。

南京の地で、セミナーに参加している時は、日本に対して、怒りが湧いてきた。こんなに大事な問題をどうして否認、回避し、向き合おうとしてこなかったのか、今も向き合おうとしないのかと。もちろん、私もその一人であることを自覚し、自覚したからには、責任回避に加担しないよう、自分の生き方を考えていきたいと思う。

今、日本では、虐待、DV、いじめ、性暴力、老人虐待、パワハラ・・・など、暴力の問題は家庭、学校、職場・・・と至るところに、日常茶飯事に起こっている。今ある暴力の問題をなくし、世代間連鎖にストップをかけるためには、その土壌をしっかりと見据える必要があることを頭の理解だけではなく、身体で実感した。私は、阪神大震災を大阪で経験しているが、10年以上たった今も、震災直後に神戸に入った時の街の光景、雰囲気、音（救急車のサイレン）は忘れない。緊張感と共に残っている。私のほんの僅かな、部分的な震災体験であるにも関わらず、ショックの感覚となって記憶に焼きついている。それが戦争というと、どれほど被害も加害も大きな影響を与えているのだろうか・・・と想像すると気が遠くなりそうである。そんな大規模な影響に晒されるなかで、自分には何ができるのかと思う。

日本に帰国してしばらくしてから、さらに自分自身の変化を感じるようになった。人に対して優しくなれる自分に気付いた。人の痛みに対して、共感の気持ちが深まった気がした。アルマンド氏の論文で「共感の文化を創る」と書

かれていたことに、とても興味を惹かれたが、実際にセミナーに参加して見て、セミナーの意義は、こうして共感の文化を創っていくことにあることを実感した。そしてさらに自分の変化に気付いたのは、自分の仕事に、新たな意味が加わったことである。仕事として、虐待やDVなど、暴力の問題と関わっているが、「共感の文化」を伝えていきたいという思いが加わった。戦争の影響について、まだ実感として感じ始めたばかりだが、これから、どうやって「共感の文化」を創り、また伝えていけるのか、模索していきたい。

こうした感覚を持つことができたのも、中国の方、日本人のみんなと、心と身体を通して、言葉の壁を越えてつながり、分かち合えるという、深い体験ができたからこそである。

アルマンド氏の話では、参加者が変わっても、癒しのプロセスは進むという。これからこのプロセスがどんなふうに進んでいくのか、とても興味深い。そのプロセスを見届けたいという気持ちである。もし機会があって参加することができるなら、ぜひまた参加したい。ただ、今度はもう少し言葉も勉強していきたい。今回は中国語も英語もできず、食事の時間など、話したいけど話せない、もどかしさを感じた。もっと中国の人と話がしたかった。

今回の機会を与えて下さり、また主催して下さいの皆様、邦子さん、アルマンドさん、あやさん、そして中国の先生方や学生の皆さん、日本の学生や留学生の皆さん、本当に感謝しています。中国の人たちも優しくかったけど、日本の学生の皆さんも人に対してとても優しく、柔軟であり、未来への希望を感じました。参加できたことに、心から感謝しています。ありがとうございました。

回顾全程后的感想

西 順子

回到日本，最先想到的是，得以参加这次研讨会，真是太好了。回到家中立即特别开心地将南京之行所体验到的感受告诉了丈夫和孩子们。同时很想让丈夫和孩子们也能有这种体验。回到日本后，感觉到了自己能够踏踏实实地站在这块土地上了，去中国前没这么踏实。也许是一种更安定感吧。同时也注意到自己很